

きよ す じょう か まち  
清 洲 城 下 町 遺 跡

調査の経過

清洲城下町遺跡は、濃尾平野の中央を南流する木曾川水系五条川の中流域に形成された自然堤防及び後背湿地上に展開する古代から近世にかけての複合遺跡である。発掘調査は、昭和57年に名古屋環状2号線関連調査として開始されて以来、既に10年を経ようとしている。今年度は五条川改修関連調査（A～C）4820㎡、県道新川・清洲線関連調査（D・E）847㎡の合計5667㎡について実施した。

五条川改修関連調査は、調査開始以来6年目を迎えるが、今年度は昨年度から着手した



第1図 調査区位置図 1:10000

現堤防下の調査が本格化し、築堤以前の様相がかなり明らかとなった。遺構は、近世宿場町、清洲城下町前・後期の3時期に認められ、A・B区では近世の溝や畑地、城下町後期の礎石建物などが検出された。また、C区では城下町外縁部の様相を垣間見ることができた。

一方、5年目を迎える県道新川・清洲線関連調査では、昨年同様、前述の3時期に加え奈良～室町時代の遺構・遺物が確認された。調査区が長狭なため、遺構の全形を確認することはできなかったものの、城下町期の礎石建物や奈良～室町時代の竪穴住居などが検出された。また、城下町期の焼土面や地震による断層・噴砂も確認されるなど、五条川東岸部の様相解明に向けて、数多くの知見を加えることとなった。（金子健一）

### 五条川河川改修関連（A・B・C区）

本年度の調査のうち、A区とC区について調査区ごとに概要を述べる。

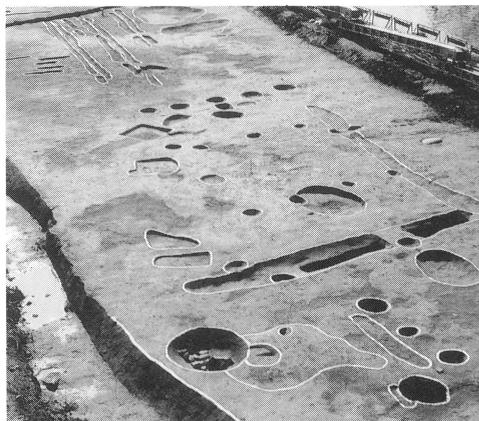
**A区** A区は清須城中堀の直ぐ南に位置し、現在の堤防下の部分を調査した。基本層序は、上位からI層：表土、II層：1794年の瀬違えに伴う堤防本体の砂層、III層：清須城廃城以降の盛土層、IV層：天正地震による噴砂層、V層：城下町期前期の包含層（このなかには幾度かの洪水による堆積層が確認される）、VI層：ベースであるシルト層と堆積する。調査は、III層（盛土層）の上面で宿場町期前期、IV層（噴砂層）の前後で城下町期後期および城下町期前期の後葉、VI層（ベース）で城下町期前期の遺構群をそれぞれ確認した。ここでは、城下町期後期・宿場町期前期の2時期について記述する。

城下町期後期の遺構としては、礎石建物、配石遺構、溝、井戸、廃棄土坑などがある。礎石建物は調査区のほぼ全域で確認され、空白地には廃棄土坑が掘削されている。礎石建物の中には、柱間がおよそ60cmの3間×5間の総柱建物が1棟存在し、付近の廃棄土坑から狛犬が出土したことからこれは祠跡と推定できる。また、これまでの調査例で検出したような屋敷割りの溝・堀・柵列は明確に確認できなかった。この地点の性格は現在検討中の課題である。

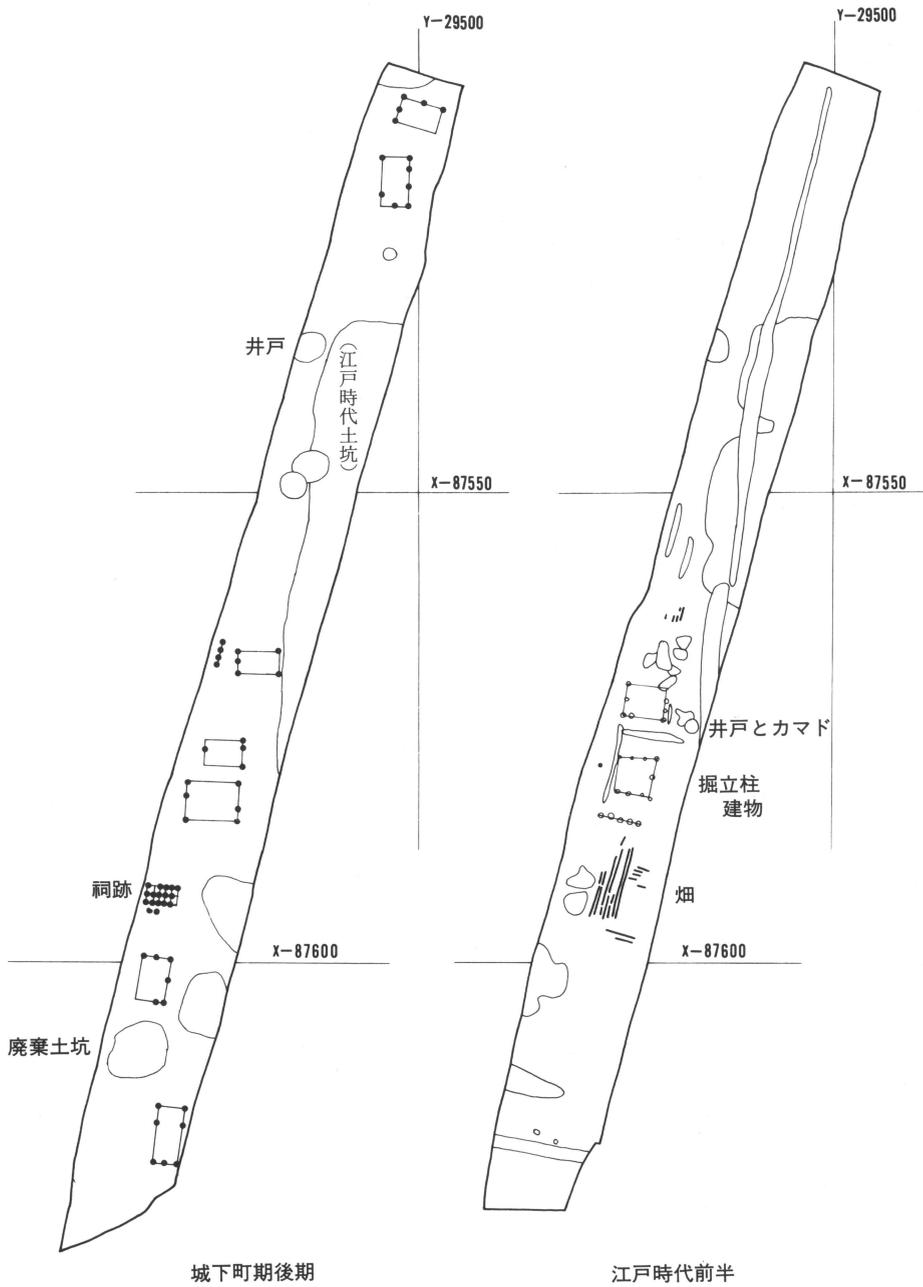
宿場町期前期の遺構には、掘立柱建物、溝、井戸、畝状遺構、廃棄土坑などがある。区画を現す溝は、現流路にほぼ平行する方位とほぼ南北に走る方位の2者に分けられるが、これらは道路の側溝の可能性が考えられる。また、この区画溝に直交する形の区画溝・柵列も存在し、これらの境界で区分された区画には、掘立柱建物・井戸・廃棄土坑が配置される区画と畝状遺構が展開する区画の2種類が認められる。遺構の在り方から短冊型地割を形成していたと想定できる。また、最大長が30mを越える不定形の巨大な廃棄土坑も確認でき、この中から18世紀後半の遺物や礫などが出土している。性格は不明。



A区全景



A区宿場町期の屋敷



第2図 A区遺構図

C区

調査区は清須城本丸跡から約1.5km南に位置し、城下町の南端部に該当する。遺構は城下町期後期と鎌倉時代のものがある。

城下町期後期の遺構は井戸、溝、廃棄土坑、ピットなどがある。溝は東西方向に走るものが2条（S D01、S D02）存在し、その間隔は14mを計る。また、これに直行する溝も一条検出されており、この3本の溝で囲まれた区画が認められる。この区画の内部には、柱穴と思われるピットが数基、中央部に井戸が2基、区画溝に隣接した場所に廃棄土坑などが配置されている。この区画はこれまで調査した地点と合わせて考えると、東西方向に長い短冊型地割の屋敷地の一部分であると言えよう。

東西方向に走る溝S D01の南は、不定形の土坑などがみられる。この土坑からは円礫、陶磁器などのほかに骨片が出土している。特に、S K22では、散在する径20cm程度の円礫の直下から骨片が発見されている。骨片は白色で非常に細かい破片となっており、焼骨の可能性も考えられよう。この部分では、井戸や建物など生活の痕跡を示す遺構が無いことも考え合わせると、墓域となっていた可能性が高い。

鎌倉時代の遺構は幅5mの溝が1条存在するのみである。平面形は直線的ではなくやや不定形で、南から北に向かって水が流れるように傾斜している。最下層から12世紀中頃の灰釉系陶器の椀が出土しており、この段階に掘削されたものと考えられる。またこの溝の埋土上に天正地震の噴砂が堆積しており、16世紀には埋積したものであろう。中世における開発に伴う水路という性格が想定できよう。

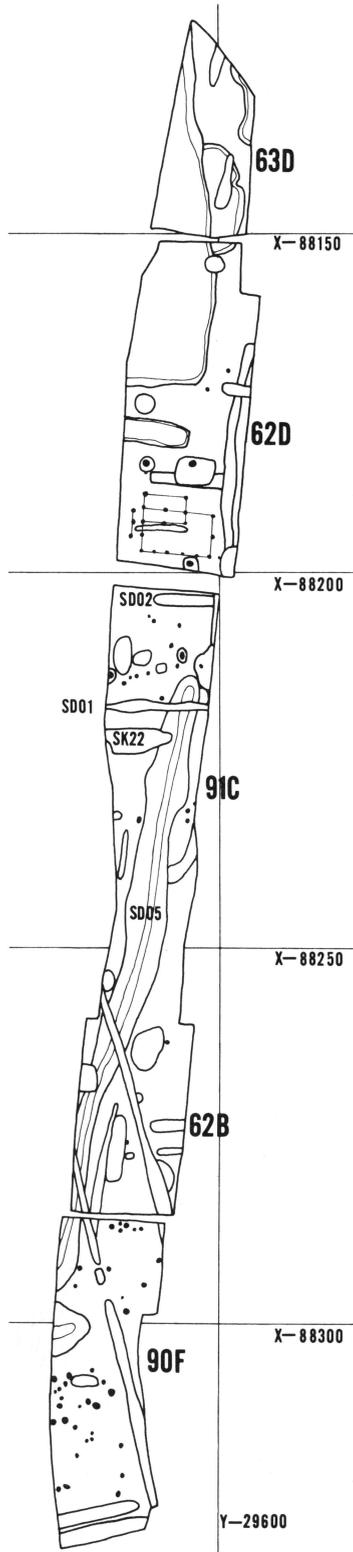
出土遺物は、城下町期後期に位置付けられるものが大半を占める。1は天目茶碗、2は長石釉の皿、3は内面に同心円文の入った無釉の皿、4は染付の皿、5・6は向付、7・8は土師器の鍋、9は播鉢である。



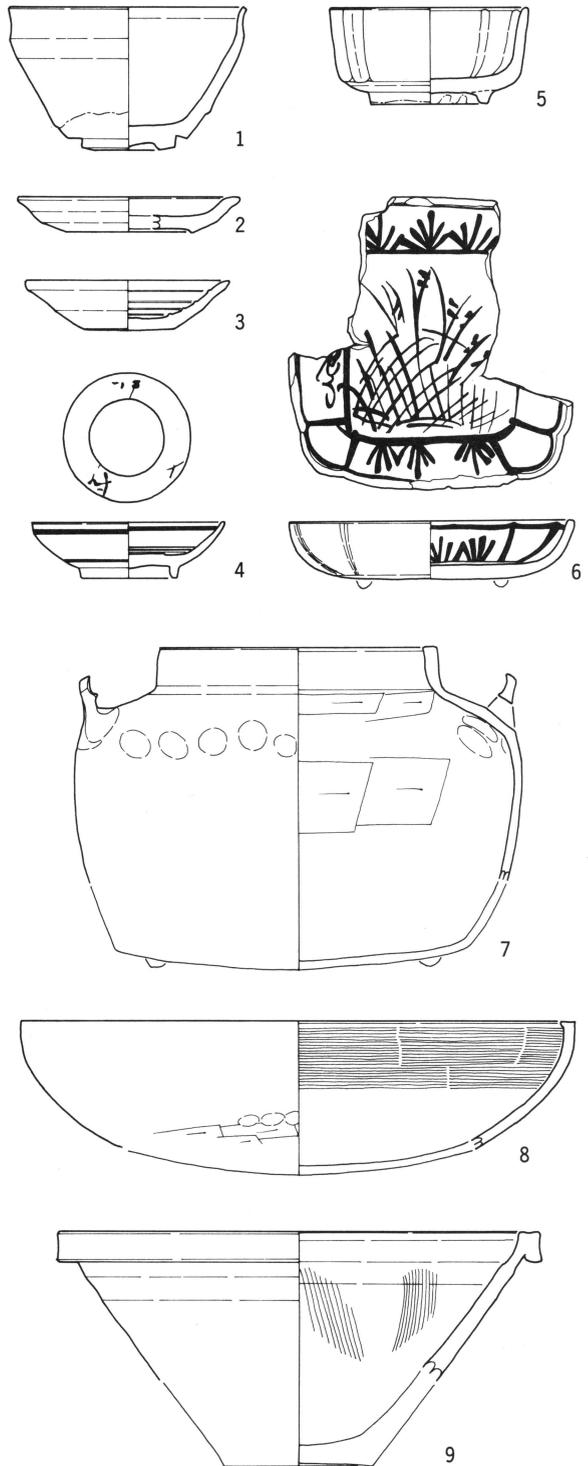
C区全景



C区骨出土状況



第3図 遺構図



0 10 cm  
 ( 1、3、5、6、7、8=SK 22 )  
 2、4、9=SK 02 )

第4図 出土遺物

県道新川清洲線関連 (D区・E a区・E b区)

調査区は、五条川の流路に対して垂直にトレンチを掘削した形となった。流路に近いD区では旧五条川が検出され、最も遠いE b区では五条川左岸の安定した自然堤防が形成されていた。旧五条川は16世紀中頃に埋積したものと考えられ、戦国時代後半以降の遺構は調査区全域に見られた。しかし、D区や自然堤防の縁辺部にあたるE a区では、戦国時代以前の良好な生活面や遺構は存在しなかった。

検出した遺構は、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代、城下町期前期(戦国時代)、城下町期後期(戦国時代～江戸時代)、江戸時代後期の5時期に大別できる。

奈良・平安時代の遺構はE b区で竪穴住居8棟、溝3条、土坑などが確認された。竪穴住居は切り合い関係を持ち、複数の時期に細分が可能である。S B302からは須恵器杯蓋(1)・杯身(2)・土師器甕(3)が出土し、8世紀中頃に比定できる。

鎌倉・室町時代の遺構としては、E b区の東端部でピット群を検出した。現在の地割に平行する形で配列するものも見られ、掘立柱建物あるいは柵列が存在していたものと推定される。14世紀代の灰釉系陶器が出土している。

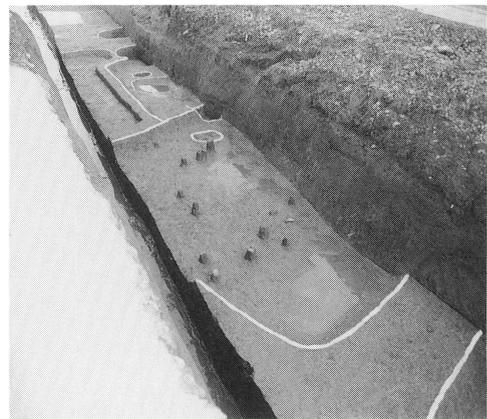
城下町期前期は、更に旧五条川埋積前後で時期細分が可能である。旧五条川埋土中からは窖窯後期～大窯Ⅱ期の遺物が出土した。旧五条川埋積後には礎石建物1棟・区画溝1条・廃棄土坑などが存在する。なお、この生活面は天正地震の噴砂に覆われ、1586年よりも遡ることが確認できる。

天正地震の噴砂を覆う形で焼土面が一部で検出され、城下町期後期の廃棄土坑などがこの面から掘り込まれている。しかし、建物や屋敷割りの遺構は確認できなかった。

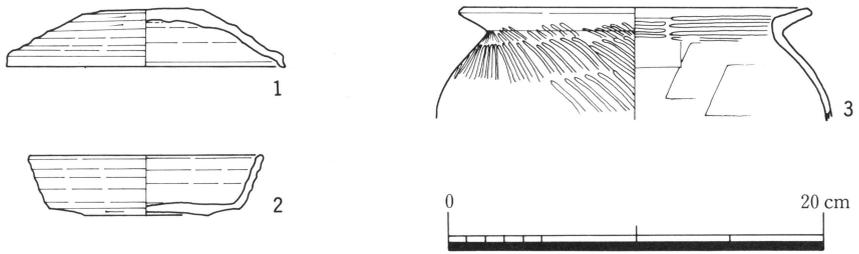
江戸時代の遺構は、D区で井戸と推定される土坑が若干認められた。宿場町期後期の時期に該当するものと思われ、町屋復元の一助となるであろう。



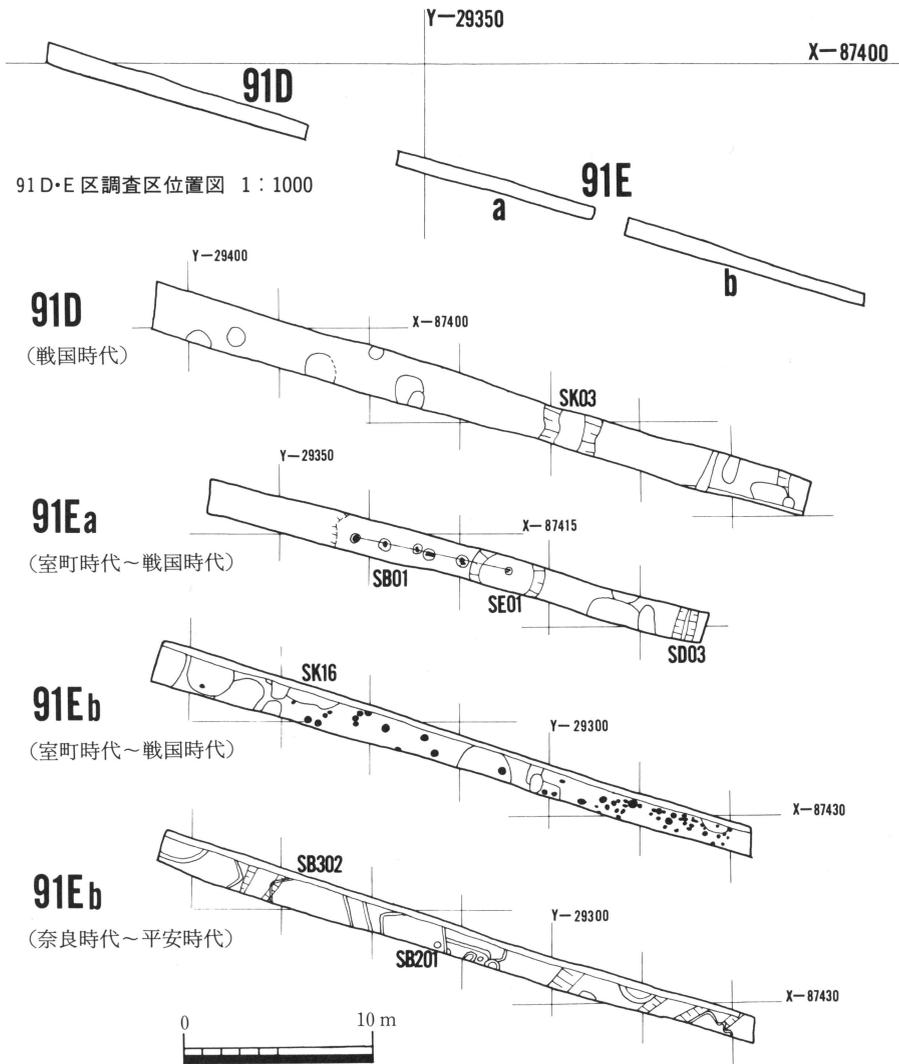
E区 S B 01



E区 S B 201



第5図 S B302出土遺物



第6図 91D・E区遺構図

## まとめ

今年度の清洲城下町遺跡の調査は県道新川清洲線関連の調査(847㎡)と五条川改修関連の調査(4,820㎡)である。前者の調査区はほぼ東西方向で幅が約4m前後と狭いものであったが、長さが150mにわたって設定された。一方、後者の調査区は3地点に分かれているが、五条川左岸に沿ってほぼ南北方向に計500mの長さにわたって設定された。その結果、清洲城下町の南半分を縦横に断ち切って調査した形となり、種々の興味深い事実を得ることができた。

県道新川清洲線の調査区においては古代から近世までの連続とした人間生活の痕跡を見出すことができた。下層では古代・中世の集落が見つかった。城下町期では調査区の西端で天正地震(1586年)と思われる噴砂に覆われる形で旧五条川の川岸を検出したが、当初の予想よりかなり東側に入り込んでいたことが確認された。

五条川関連の調査区ではA区、B区が現在の堤防下ということで、五条川瀬替え(18世紀末)以降の攪乱を全く受けておらず、きわめて良好な形で遺構を検出することができた。特筆されるのはA区における城下町後期の様相である。A区ではこれまでの調査区でなかったような所見がいくつか見られた。一つには数棟の礎石建物群を検出したことである。礎石建物群は方向もほぼ同一で、かなり規則性を持っている。そのうちの1棟は総柱建物で、すぐ南の廃棄土坑から狛犬等も出土していることから「お堂」の様な建物とも考えられる。出土する遺物も従来の調査区のものとは違い、廃棄土坑などからは志野、織部といった瀬戸・美濃産の茶陶類に加えて東南アジア産と考えられる陶器や中国・朝鮮産の白磁・染め付けなどかなり質の高い陶磁器がまとまって出土している。さらに、今までの調査区でよく検出されている区画溝がほとんど見られない点も特異である。一つの大きな区画の中なのか、区画する必要のなかった場であるのか興味深いことである。位置的には中堀の虎口(出入口)を出たすぐ正面に当たることなどから、従来考えていたような通常の屋敷地とは違った空間であった可能性が高い。それ以外に、城下町前期では多数の井戸と一辺約45mの区画溝で囲まれた武家屋敷地をいくつか検出している。

南のC区では屋敷を区画する溝が数条検出されているが、それより以南は不定形の土坑などが見られ、中には円礫と共に骨片などが入っているものもあった。

今年度の清洲城下町遺跡の調査は今までの中で最も広い調査区を調査し、種々の興味深い事実を得た。これで、五条川関連の調査面積はすでに4万㎡を超え、予定面積のほとんどを終了したこととなる。この間、検出した多数の遺構・遺物の一つ一つがそれぞれの時代の人々の営みの断片を豊かに想起させてくれる。今や、これらの断片をつなぎ合わせ、生き生きとした人間生活を復元する時期にきていると言えよう。(城ヶ谷和広)